

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Obesity as a potential risk factor for stillbirth: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠前の肥満と死産との関連について

ユニットセンター(UC)等名: 甲信ユニットセンター(山梨)

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Preventive Medicine Reports

2023 年: DOI: 10.1016/j.pmedr.2023.102391

筆頭著者名: 篠原 諭史

所属 UC 名: 甲信ユニットセンター(山梨)

目的:

海外の報告によると、妊娠前の肥満は死産のリスクを上昇させるとされています。しかし、死産率は地域や国ごとに異なっており、本邦において同様の関連が認められるかどうかについては一般的な見解がありませんでした。今回は、エコチル調査のデータを用いて、本邦における肥満と死産との関連について検討しました。

方法:

研究同意を得てエコチル調査に参加した妊婦のうち、欠損データのない 93,722 名のデータを用いて解析しました。死産は、妊娠 22 週 0 日以降に、赤ちゃんが亡くなった状態で出産になることを指します。非妊娠時 BMI と死産との関連をその他の死産のリスク因子を含めて、多重ロジスティック回帰分析で検討しました。また、妊娠 28 週未満の死産と非妊娠時 BMI との関連についても同様の方法で解析を行いました。

結果:

死産は全体で 305 名 (0.33%)、28 週未満の死産は 155 名 (0.17%) でした。非妊娠時 BMI が 25 以上は死産と有意な関連を認めました。また、妊娠 28 週未満の死産については非妊娠時 BMI が 30 以上で有意に増加することがわかりました。

考察(研究の限界を含める):

肥満と死産との関連については、諸外国の報告の見解と今回の研究結果は一致しました。これは、死産に至る経路が国や民族を超えて共通であることを示唆していると考えます。死産が社会経済的な要因だけでなく、生物学的な要因にかなり起因することを示唆している点で重要です。肥満が死産を引き起こすメカニズムについて詳細な研究や実験を行うことで、日本だけでなく世界的に死産を減らすことができるかもしれません。研究の限界としては、死産と関連する内科疾患や妊娠中の喫煙に関する十分な情報を得られていないことが挙げられます。

結論:

妊娠前の肥満と死産との関連について本邦でも有意な関連があることがわかりました。死産という悲劇を少しでも減らすためには、妊娠を考えている女性に対して、適切な体重管理に関する十分な周知が必要だと考えます。